



やぐら通信

～ひとみキラキラ豊かな心と体の矢倉っ子～

チャンスはたくさんある … 続けることの大切さ

「チャンスはたくさんある。努力や練習をずっとしているからこそ、チャンスはつかむことができる。」「チャンスをつかむための努力や練習を続けているとき、人はあきらめるための理由をさがしがちになる。けれど、続けるための理由をさがしなさい。」

学区にお住まいの笠松研太さんの言葉である。笠松さんは、第24回世界料理オリンピック個人競技「銅」メダリストだ。過日、卒業を控えた6年生の子どもたちに、「夢をあきらめない大切さ」について語ってくださった。

チャンスはたくさんあるという話の中で、こんな言葉も添えられた。

「注意されたこと、これを受け入れる力も大事だ。」「注意する側は、される立場の者よりも、実はつらい思いをしていることがある、叱られる人より、叱る人の方がつらい。」と。

これは、働き出してから学んだことで、上司から厳しい言葉を浴びせられる体験から手に入れた生き方だそうだ。一つ間違えれば、伝えてもらいたいことも伝えてもらえず、単に怒られただけになってしまうところを、よいものを一緒に求めていこうとする願いを、上司とわかちあいながら乗り越えていこうとする、そんな姿が見えてくる。料理という世界で、ほんものを掴もうとし、ほんものを求め続けているからこそ手に入れた至言だ。

私たち大人は、しつげだからと「なんで、そんなことするの。」「だめじゃない。」「どうして、それくらいできないの。」と子どもに詰めよることがある。強く期待し、願いをかけているからこそ思わず出てしまう言葉だ。自分の思っていたとおりになっていないから、なんとかしてほしいということで、強い感情が沸き立ってくる。それを受け手である注意を受ける側では、「うるさいな。」「いやだなあ。」と受け入れにくくなってしまう。

しかし、笠松さんは、それを一度受け入れて、こんな自分にはそれほどまでに強い願いがかけられているのだ、なるほどそうかもしれないと、自身を生かすエネルギーにしていくことが大事だと気づかされたという。相手を生かしつつ、自身も救われていくと言っていいような生き方だ。どうかすると、「自分はきっとできないだろう。」とか、「やったとしてもむだだ。」「どうせ…。」とあれこれ理由を付けてごまかそうとしたり、いいかげんにすまそうとしたりする。ひどいときは、やろうともしない。たいていの場合、心の内では確かにこれではよくないと承知しているのだが…。

こんな話を、卒業式の校長式辞で取り上げ、卒業生への贈る言葉とさせていただいた。子どもたちには、ぜひとも幸せになってほしい。そのためにも、努力や練習を一つひとつ積み重ねつづけていく姿勢を大切にしてほしい。続けていく中に、チャンスがチャンスとして立ち現れ、ほんものになっていく。ほんものは続く。続けるとほんものになる。

この一年、さまざまにお支えいただきました。ありがとうございました。
次年度も、この矢倉小学校を、どうぞよろしく願いいたします。

校長 大林 道範